

子育てネットワークの必要性と課題について：筑豊 子育てネットワークの活動事例より

相戸，晴子
子育てネットワーク研究会

<https://doi.org/10.15017/9005>

出版情報：生活体験学習研究. 1, pp.71-80, 2001-01-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

子育てネットワークの必要性と課題について

—筑豊子育てネットワークの活動事例より—

相 戸 晴 子

A Research on the Necessary and the Problem of Child Learning Network

—from the Chikuhou-Kosodate-Network's Action—

Aito Haruko

要旨 現代の社会問題である、少年犯罪。その子どもの背景をたどっていくと、幼年期の育ちに問題を抱えていることが多いという。

乳幼児期において、子どもの育ちの大きな環境の一つとして「家庭」があげられる。親たちは、何を考え、何を求めて子育てをしているのだろうか。

「子育てネットワーク」活動をもとに、今後の子育て支援システム構築の方向性を考察していく。

キーワード 親の体験学習、子育てネットワーク、孤育て孤育ち、子育て支援システム

はじめに

子どもたちの問題行動があとを絶たない。精神科医の服部祥子氏は「思春期の危機をのり越える上にもっとも大切な火種が弱小化していることは、幼少期からの育ちが不健康で不適切と言える可能性が大きい⁽¹⁾。」と言っている。この火種とは、「自己を愛し自己に価値を見いだす自己意識と、他者の存在を認め他者と共に生きる味わいを大切にす対人感情がその中核であろう」と説いている。平たく言えば、子どもは基本的信頼感により愛されること、他者と遊びや学習を通じて生活体験を多く持つ教育が必要となる。

親は子どもを生活全体の中で愛しているだろうか。肯定的、否定的人間関係を培う体験を親自身が摘んでしまっていないだろうか。

スイスの動物学者ポルトマン (1897~1982) は、人間の誕生時の状態を「生理的早産 (通常化してしまった早産)」と呼んでいる。人間の赤ちゃんは、人間の社会的・文化的環境の中での相互作用が与えられなけれ

ば「人間らしく (直立歩行、言葉の使用、洞察力ある行為)」なり得ないということである⁽²⁾。

これらのことにより、人間形成において幼少期の生活体験はたいへん重要なことだとわかる。特に依存無くしては生きていけない乳幼児時期、親や養育者の影響力は図り知れない。

現在子どもを取り巻く環境は、核家族化、少子化、血縁関係の希薄化、子育て文化伝承の減少、ライフスタイルの多様化、そして親の未熟さなど多くの社会問題を抱えており、子育てが困難だと感じる親のもとで生活している子どもも少なくない。児童虐待・育児放棄といった子育て中の親の問題行動続出は、現代社会の病理とも言える。こんな時代だからこそ、子どもの生きる力を培うと同時に、親が育つための「体験学習」の重要性を強く考えるのである。

現在の子どもたちにとって、育成環境をおとなが意識的に準備することが必要となっている。私は自身の子育て体験を踏まえながら、生涯発達の「根っこ」部

連絡・別刷請求先 (Corresponding author)

子育てネットワーク研究会 相戸晴子 メールアドレス inuo@bronze.ocn.ne.jp (TEL&FAX (092) 921-5359)
The Society for the Study of Child Learning Network. 子育てネットワーク研究会

分である乳幼児期の親の「子育てネットワーク」活動に関わってきた。

本稿では2000年1月に実施した「乳幼児を抱える親の意識調査」をもとに、親たちが何を考え、何を求め、どんな気持ちで子育てしているのかを探り、その問題解決に何が必要かを考えていく。そして「筑豊子育てネットワーク」活動事例をみながら、本当に求められている「子育て支援」のあり方と、今後の「方向性」について考察していく。

1. 「筑豊子育てネットワーク」発足

「筑豊子育てネットワーク」とは、育児中の母親の孤立など、閉塞された子育て環境を打開するために、乳幼児子育て真っ最中の母親が中心となって、1997年に発足した会である。最初は母親9名からスタートした。子どもに関する社会保障、0歳からの保健福祉、公民館等社会教育事業（生涯学習）にみなそれぞれ疑問をもっていたが、それをどのようにして活用し、どのような活動をすべきなのか、なすすべを知らなかった。

乳幼児を抱えた親にとって、ほんの短い時間でも会議を持つことは大変な苦勞を要した。授乳をしながら、泣く子をあやしめながら、おむつを替えながら、あるいはおもちゃで遊ばせながら、「子育ての問題について」学習を重ね、日常的対話にとどまらずいかに社会全体を論理的にとらえることが必要かを考えていった。

そんな発足当時、飯塚市で『福岡県立大学公開講座—地域の子育てを考える—(全7回)⁽³⁾』が開講された。当初併設されていなかった「保育」をつけていただき、子育て中の親である我々も参加することが出来た。その時まさにやろうとしていたことの多くがこの講座に凝縮されており、その後の会の活動に大きな方向性を示してくれることになる。

このとき、初めて子育てをしながら学習をするという「体験」を味わった。24時間育児づけの母親にとって、自分だけの時間をもてることは少ない。けがをしないように、危険な物を口に入れないようにと、目を離されない緊張した毎日を過ごしている。だからこの2時間の講座は、安心して子どもを預け、自分だけの時間を保証されることによって、生活に追われ見えなくなりつつあった、自分自身を見つめ直すことができた。そのような段階を経て講座に参加することによっ

て、子育ての知識を得ながら「子育てで大切なこと」を考えるきっかけとなったのである。

また親の学習と同時に、週に1回2時間、母親以外の人と触れ合う「保育」は子どもたちにとって、大変貴重な体験学習となったようである。最初の頃は、預けるとき泣くこともあった。日常生活で母子密着の毎日を過ごしていた子どもたちにとっては、最初は驚きと寂しさが大きかっただろう。しかし回数を重ねて幾たびに、母親だけでなく地域に自分を見てくれる人がいることを理解し始めた。また、子ども同士の交流は大変楽しかったようだ。このような託児室での時間は、対人関係(人見知りなど)、異年齢集団、独占欲や占有欲(おもちゃの取り合いなど)、いろいろな面で成長を感じることが出来た。

このように、子どもを一時保育して親が学習をすることは、全国的に見るともっと前からいろいろな取り組みがおこなわれていた。東京・国立市公民館の「学習としての託児」の実践は、元公民館職員、伊藤雅子さんらが書かれた著書⁽³⁾で知られている。1970年代から取り組まれた「公民館保育室」の重要性は、自分がその立場になってなおさらに痛感したことである。子育て学習の「学習」とは、育児知識や技術の取得に限らず、コミュニケーションを図ること、ストレスを解消すること、息抜きをすること、さらに楽しむことも、大切な要素であることもわかった。それまで後ろめたさを感じていたが実は、これらの学習を加えることに乳幼児を抱える親の家庭教育のスタートであると考え、「筑豊子育てネットワーク」の活動は始まった。

2. 「筑豊子育てネットワーク」の概要

発足から3年たち、会の活動は随分広がりを増してきた。ここでは団体活動状況を説明しておこう⁽⁴⁾。

子育てのネットワークを結ぶために、これらの活動を行ってきた。「子育てネットワークの意義」を問うために、次の章で「子育てサークル」と「子育てネットワーク」との違いについて考えていく。それは、ネットワークに参加した母親から、「子育てネットワークとは何ですか？子育てサークルとどう違うのですか？」たびたび質問される内容だからである。運営者自身も「子育てネットワークとは何を目指しているのか？」混乱することがあるので、ここで整理しておきたい。

(資料1) 『筑豊子育てネットワーク』団体活動状況

1. 団体名 筑豊子育てネットワーク
 2. 代表者 稗田 佳子
 3. 会員数 52名(平成12年1月現在) 子育て支援ボランティア 97名
 4. 設立時期 平成9年10月16日
 5. 活動範囲 主に飯塚市・山田市・嘉穂郡
 6. 活動場所 主に飯塚市女性センター「サンクス」(飯塚市飯塚14-67)
 7. 活動時間 主に毎週木曜日 10:30~12:00
 8. 活動資金 月会費200円 県・市からの事業に対する助成金・補助金、生協からの助成金
 9. 趣 旨 少子高齢化社会といわれる昨今、核家族における子育ては「母子の家庭内閉じこもり」「幼児虐待」など、様々な子育て上の問題点を孕みこうした問題は社会問題であると位置付け行政を始め地域における取り組みが展開されている状況であります。このような社会情勢の中で、当事者である保護者自身も問題を真摯に受け止め対処してゆかねばなりません。そのためには、保護者間のネットワークを構築し、問題点の共有化を図り育児を取り巻く諸問題に対して能動的に改善を推進する必要があります。
- こうした趣旨により、主として乳幼児・児童とその保護者、子育て支援者を対象としたネットワークづくりを目的とし、当団体を発足いたしました。
10. 活動内容
 - (A)子育てに関する講演会や親子で楽しむイベントの開催
 - ・今までに託児つき講演会を4回、イベントを9回実施
 - (B)乳幼児とその保護者の居場所づくり
 - ・子育てサロン主催：月2~3回女性センター幼児室にて〈会員外でも見学可〉
 - ・自主子育てグループ(サークルなど)のサポート：サークルに入りたい人、作りたい人への情報提供とリーダーへのサポート。嘉飯山にはなかった公民館サークルも誕生しました。
 - (C)地域や行政の子育て支援を考える
 - ・当団体より飯塚市の委員(いづつか児童育成計画策定委員・いづつか男女共同参画プラン策定委員等)、行政関係2つの委員になり、乳幼児の親の立場から提言。また飯塚市内の幼稚園・保育園に園開放を働きかけ、昨年の秋より1園づつ実施中。
 - (D)子育て支援グループ
 - ・飯塚市内の2大学・短大・専門学校と田川市の大学の学生を中心に子育て支援ボランティアを呼びかけたところ、多くの賛同者を得ました。現在、ボランティア登録しているのは社会人15名、学生82名。昨年の6月からグループを立ち上げ、7月と11月の子育て講演会には主に保育ボランティアとして関わってもらいました。県の助成金をもとに11月の6・7日に「子育てボランティア講座」を1泊2日で行い、2大学1短大から35名の学生と社会人3名、乳幼児のいる8家族の合計65名が参加して交流を持ちました。今後は2ヶ月に1度の会合を持ち保育のみの支援ではない、関わり方を共に考えていく予定。
 - (E)子育ての情報収集と発信
 1. 会員へのメール
 - 月定例会に出席できない会員向けに毎月1回子育て情報を郵送。
 2. 地元情報誌「筑豊ジャーナル」(毎月2回、45000部発行。嘉飯山地区無料配布)への子育て情報の提供
 3. にこにこ子育てマップ「ほっぷ！」
 - 「ほっぷ！」は県から助成金をもらい、福岡の子育て情報誌「子づれ DECHA・CHA・CHA！」の協力でマップ講座を託児つきで5ヶ月間にわたり7回(うち2回は子ども連れで取材)ひらき、作成したものです。マップ講座受講者は一般から公募して、約30名の母親が参加。乳幼児・双子・障害児の母親の視点から取材した15箇所その他、病院や図書館・育児サークルなどのリストを掲載したA4サイズ14ページの冊子です。欲しい方には、活動日の活動場所で無料提供しています。郵送希望者は送料実費負担。
 4. ホームページ作成中
 - 飯塚市社会福祉協議会のホームページの中で現在作成中。

3. 「子育てサークル」と「子育てネットワーク」

最初に「子育てサークル」とはどんな活動をおこなっているか、みていく。資料2を見ていただきたい⁶⁾。

「子育てサークル」の日時は、週に1回または、2週に1回。決まった曜日、時間で行うところが多い。場所は、固定した拠点を持っている。参加者の範囲は、ベビーカーや自転車、そして徒歩で参加できる人。(しかし、地域にサークルが少ないため、車や公共機関の乗り物に乗って来る人もいる。)参加者の構成は就園前の子とその親(主に母親)で、1つのサークルに10組から15組が参加している。活動内容は、外遊び、親子体操、そして悩み相談、食についての学習や実習、季節行事、お祭りなど幅広く、参加者皆で計画をたてて行っていく。子育てサークルは、グループ子育てをす

る事によって、子どもにとっても大人にとっても、楽しい子育てをする事が出来る。いわゆる“個人的欲求”を満たしてくれる活動である。

では、サークルなどに参加する事ができない母親はどうしているのか? 家族、親戚などの協力により、問題なく過ごしている人も確かにいる。しかし、現代社会の現状からみて、対人関係がうまくとれないため、親子で引きこもっているケースがよくある。「公園デビュー」という言葉からわかるように、母親が人間関係にプレッシャーを感じ、ますますストレスを増しているのである。このような子育て環境では、「児童虐待」「育児放棄」は益々危惧されるばかりである。

対人関係が苦手、子育てに自信がもてない、子どもの発育に不安がある、友達が欲しい、託児を利用して

(資料2) 筑紫野市内の育児サークル

サークル名	対象年齢	日 時	場 所	活動内容	月会費
親子リズム	0歳～就園前	毎週金曜日 10:00～12:00	中央公民館	リズム体操、手遊び、絵本の読み聞かせ、いもほり etc… 季節の行事を組み込みながら、母親中心で内容を決め、活動しています。	1000円
ポレポレ	0歳～	第2、4木曜日	山口コミュニティセンター	いきいきこ教室の後、みんなでお弁当を食べ、いろいろな悩みを相談したり、子どもたちと遊んだりしています。クリスマス会、豆まき会等季節のイベントもしています。	0円
にこにこキッズ	なし	第1水曜日 10:30～12:30	山口コミュニティセンター	子育て中のお母さんたちのふれあいと勉強の場です。子どもの遊びもあります。	0円
ちびっ子ザウルス	0歳～ 未就園児	毎週金曜日	山家コミュニティセンター	リズム体操、手遊び、絵本の読み聞かせ、リサイクル工作、幼稚園との交流会など季節ごとにいろいろな行事を楽しんでいます。	0円
おひさまくらぶ	2歳～ 未就園児	毎週火曜日 10:00～12:00	吉松共同利用施設 (太宰府市)	楽しい育児をみんなでしよう。お母さんも楽しい、キラキラおひさまびよりを目指しています。	500円 (おやつ含む)
フリー チャイルド	0歳～ 未就園児	第2、4月曜日 10:30～12:30	筑紫駅前通 公民館	親子で季節の行事や工作、リトミック、ステンスル等みんなですっきり楽しませよう。	100円

学習したい、地域の子育て情報が欲しい、その他いろいろな悩みがある、そんな母親にこそ子育てネットワークをつなぎ、孤立感や閉塞感を打開する必要がある。それゆえ、子育てネットワークの活動内容は当事者の親だけでなく、地域や行政との連携も欠かすことは出来ない。それぞれが、それぞれの立場でやらなければならない課題に取り組んでいく必要がある。その観点から、「子育てネットワーク」は“社会的欲求”を満たしていく活動が求められている。

4. 「乳幼児を抱える親に対する意識調査」について

このような、大きな目標のもとで活動を行ってきたのだが、発足から3年経ち、「子育てネットワーク」に関わる親の価値観にそれぞれ違いがあることがわかってきた。何を大切に活動をおこなうべきなのか、方向性が不明確になってきたのである。そのため、会の必要性に対する現状把握を行うことにした。次の資料3のように意識調査を実施し、まとめることが出来た⁽⁷⁾。

(資料3) 乳幼児を抱える母親に対する意識調査について

(3-A)

1. 調査の目的

子育てネットワークの必要性和メリット、そしてデメリットを意識調査し、活動の現状把握と課題点を探る。また活動にかかわる親が、どのような生涯学習意欲を示しているのかを考察する。

2. 調査項目

- ① 子育てネットワークの必要性
- ② 子育てネットワークの参加理由
- ③ 活動におけるメリット
- ④ 活動におけるデメリット
- ⑤ 生涯学習意欲の動向

3. 調査の設計

(1) 調査対象

福岡県、鹿児島県の子育てネットワークや子育てグループ(9グループ)に関わる乳幼児を持つ親。

(2) 調査票調査(郵送法、留置法)

(3) 調査時期 2000年1月15日~2月15日

(4) 回収率

配布数	回収数	回収率%
220	150	68

5. 意識調査結果の特徴

この意識調査から、①「子育てネットワークの必要性」は大いに必要、必要を合わせて98%という高い数値にのぼった。特筆すべき点に②「子育てネットワーク参加理由」の結果は、親の「孤立感」「閉塞感」を顕著に表している結果だと言える。現代の、乳幼児を抱える親の典型的な生活パターン例として、一転勤族でアパート暮らし、血縁知人も少なく、夫は会社に取り残され放し。子どもを抱えての行動範囲は、スーパー、銀行や郵便局、ひとのいない公園ぐらい。二日ぐらい他人と話をしない日もある。一密室育児、カプセル育児という言葉も生まれ、孤立状態、閉塞状態からおきる育児ストレスは、天使のような我が子の微笑みさえ時として苦痛になることもある。多くの母親たちが「子育て子育て」ではなく、「孤育て孤育て」という現実に直面しているのである。

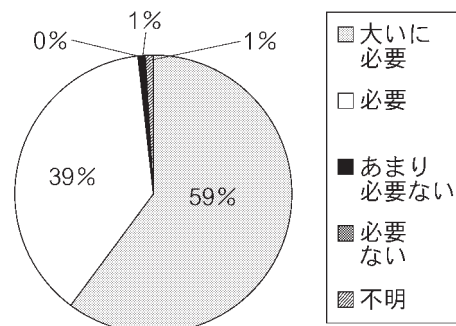
このような結果から「子育てネットワーク」に、「孤立感の打開」を求めていることがわかった。筑豊子育てネットワーク発足以来、スタッフの多くがベビー

(資料3) (3-B-1)

①【子育てネットワークの必要性】

項目	%
大いに必要	59
必要	39
あまり必要ない	1
必要ない	0
不明	1
合計	100

子育てネットワークの必要性

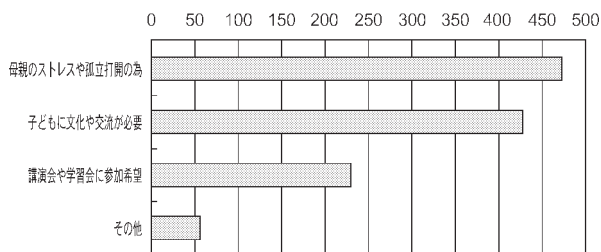


(資料3) (3-B-2)

②【子育てネットワーク参加理由】

項目	%
母親自身のストレスや孤立した子育て環境の打開の為	40
子どもの発達において文化や交流が必要と思った	36
講演会や学習会で専門家の話を聞きたかった	19
その他 ・子育て中の自分出来ること ・母親だけでなく一人人として参加 ・親子で社会参加する場が欲しかった ・母親の友達作りのため ・地域とつながりを持ちたかった ・情報が欲しかった ・転勤族のため地域を知りたかった ・支援者として参加 ・子どもの発達に不安 ・サークル運営に役立てたい ・子どもと離れる時間が欲しかった ・子育て支援施設の要望 ・ネットワークづくりに関心がある	5
合計	100

子育てネットワーク参加理由



カーでいける距離に「集いの場」「ありのままをさらけ出せる場」の必要性を訴えて続け、子どもを抱えてのイベントや事業の開催に走り続けてきたことは、大きな意義があったと言えるだろう。

意識調査③「活動のメリット」の結果から、「親子の交流、地域子育て情報の共有、悩みストレスの改善、地域社会交流、子育てを楽しむなど」子育てネットワークの魅力はたくさんあることがわかった。また、その他の項目に書かれた内容によると、母親が「母として、女性として、人間として」自分自身を取り戻す場となっていることもわかる。母親の精神衛生向上は、子どもの育ちにとって大きな部分となっているので、重要視すべき点だといえる。

(資料3) (3-B-3)

③【活動におけるメリット】

内容	%
親の交流や友達作り	29
子ども同士の交流ができる	21
地域の子育て情報共有	9
母親同士の悩み相談	7
育児ストレスの発散	6
社会性や視野の広がり	6
子育てが楽しくなった	3
地域交流	3
人の出会いに刺激	3
育児知識の習得	2
保育技術の習得	2
子育て苦労を共有	2
活動に意義を感じた	1
その他 ・知的好奇心の向上 ・パソコン技能の上達 ・本音で語れる場 ・託児があったこと ・子どもの発達不安の解消 ・子育てに真剣に取り組む ・転勤や引越の孤立解消 ・生活にメリハリがでた ・子どもの人見知り減少 ・個人の役割にやりがい ・事業のスタッフが良い経験になる ・子どもの良い面に気づく ・子どもの知らない一面を知る ・人とのつながりの大切さ ・同じ悩みを共有できる。	5
合計	100

福岡県生涯学習課は、平成10、11年度に家庭教育振興パイロット事業を行い、計200の子育てグループに助成をおこなった。初年度の当初50グループ15万円という予定が、応募数が100グループを超える結果となり100グループ10万円に変更された経緯がある。どの地域も家庭教育の問題を抱えているという結果の数字だと言えるだろう。また、各市町村でも助成事業をおこなうところが増えてきた。活動を行ううえでそれらの助成事業は、行政や地域に母親のニーズを伝えるということにおいて、大変意味があったと確信している。

私たちの会も現状を打開するために、自ら計画、立案、企画、実行、報告までを全てこなして事業に取り組んだ。

しかし現実の生活は母親一人に子育てが任されることが多く、ましてや日常の子育てと子育てネットワーク活動と助成事業をこなしていくには、母親スタッフの限界を超えることが多い。

意識調査④「活動におけるデメリット」には、「忙しい、子どもにしわ寄せ、家事がおろそかになる、出費が増えたなど」スタッフで活動している母親の「負担感」に対する意見が多く見られた。しかし活動内容には、ネットワーク構築のために必要不可欠な活動がたくさんある。子育て真っ最中の母親スタッフが、ほとんどの活動を行っている現状を改善していかなければ活動を続けることは難しいものとなるであろう。

「子育てネットワーク」実践は、歴史の浅い取り組みだけに、意識調査④「活動におけるデメリット」では運営についての問題点、課題点が浮き彫りになった。そこで意識調査を行った9団体の代表者に「運営に関

するヒヤリング⁽⁸⁾」をおこない、特に多かった問題について取り上げてみた。

① 運営スタッフの人材不足

価値観を共有できるような母親を増やしたいが、それには討議する場や時間が必要となる。助成事業の期限に追われ、日々の子育てはもちろん寝る時間も削らずにはやっていけない毎日。運営スタッフを敬遠する親も多い。また役員後継者の不足も深刻。

② イベント屋

会議のたびに、事業についての話し合いに追われている。実行委員を決め、チラシや申込書の作成、事業の立案、実働、結果報告に至るまでとにかく忙しい。もちろん子どもをあやしながら会議を進めることも至難のことである。「まるでイベント屋みたい」と指摘する人もいる。特にキーマンの負担は大きい。打ち上げ花火的な事業をする事に矛盾を感じることもある。自分の子どもを犠牲にすることも多く、なんのためにがんばっているのか判らなくなる時もある。

③ 家庭の負担増大

家事のつけは仕方ないのだが、子どもが病気になったときでさえ責任のもとに行動を余儀なくされる。また、パートナーである夫の理解が得られず、「主婦の道楽」という見方をされる場合がある。

いったい「子育てネットワークとは何なのか？」大きな理想はあっても、子育てに四苦八苦しながらの活動に意義を見失う母親も多く、ネットワーク構築の底辺である親の広がりにも今一つ欠けている状況である。それぞれの地域で活動している「子育てネットワーク」の視点は、「まちづくり」「文化」「医療福祉」「ジェンダー」「政策」「遊び」などと幅広い。特に専門職や研究者との連携が少ない親中心のネットワークは、母親の主体性は十分発揮されるメリットはあるものの「現状の活動はこれでいいのか、これからどういった活動がベストなのか、スタッフの負担が増すのではないかなど模索しながらのものであることが、意識調査やヒアリングでわかってきた。

最後は、子育てネットワークにかかわった人が今後どのような生涯学習ニーズを持っているのかを調査し

(資料3) (3-B-4)

④【活動におけるデメリット】

内 容	%
なし	55
忙しい	11
活動優先で子どもにしわ寄せが来ていると感じる	9
役がまわってくる	4
家事がおろそかになる	4
グループ内の人間関係に悩む	3
活動不参加の時に負い目を感じる	2
出費が増えた(通信費、交通費、参加費等)	2
子ども同士のけんかやケガ	2
親同士の価値観の違い	1
活動に対する悪評価	1
わからない	1
その他 ・話が堅い ・活動日が少ない ・他の子どもと比較してしまう ・会が大きくなりすぎて楽しくない ・家庭内で過ごす時間が減少 ・遊びや歌の当番が苦手 ・教えたくないこと後に回したいことも早く覚えた ・グループの機能や組織が未熟	5
合 計	100

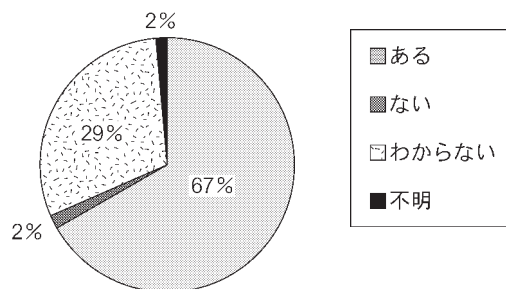
た。意識調査⑤「生涯学習の学習意欲」は、学習意欲がある37%という高い結果となり、今後の生涯学習の内容についても、「子育てネット活動、子ども文化や育成活動、ボランティア、地域活動など」ネットワーク活動を行うことによって生まれた項目が、100%中26%にのぼることがわかった。4人に1人は今後の社会教

(資料3) (3-B-5)

⑤【生涯学習の学習意欲】

項目	%
ある	67
ない	2
わからない	29
不明	2
合計	100

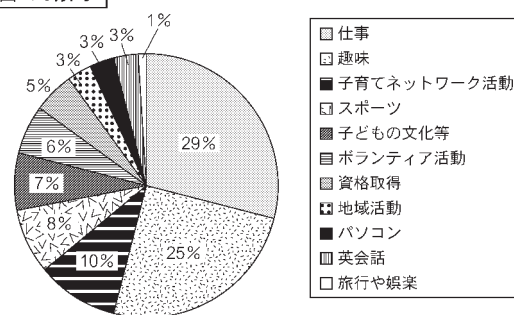
生涯学習の学習意欲はあるか



※あると答えた方の具体的内容

内容	%
仕事	29
趣味	25
子育てネットワーク活動	10
スポーツ	8
子どもの文化や育成活動	7
ボランティア活動	6
資格取得	5
地域活動(環境や女性参画問題等)	3
パソコン技能習得	3
英会話	3
旅行や娯楽	1
合計	100

生涯学習の動向



育活動の人材となる可能性を秘めている。子育てネットワークをすすめるうえで、「人材」は何よりも大切な要素である。人材養成の場としても効果をあらわしている、といえるだろう。

このように親にも子にもそして地域社会にも多くの収穫がある活動だからこそ、全国各地で子育てネットワークが生まれているのだろう。

6. 今後の「子育て支援」

さっぽろ子育てネットワークの河野和枝氏は、「子育て責任が親だけに委ねられている限りにおいては、少子化も子育ても困難も解決しない。社会全体が子育てに責任を持つシステム(制度も意識も)をつくらなければ、現状から抜け出すことは不可能である⁽⁹⁾。」と言っている。これは子育てに対して「社会全体のシステム構築」の必要性を言っているのであろう。

文部省は、平成12年度主要事業に「子育て支援ネットワーク構想」の事業を打ち出している。福岡県についても、県内6教育事務所単位に「たのしかネット事業」を進め子育てのネットワーク構築に力を入れている。

まさに課題となっている「子育てネットワークと社会全体のシステム構築支援事業」のスタートだといえる。支援する側される側のズレを出来るだけ小さくするためには、行政が環境醸成につとめ、ネットワークの中心に子育て中の「親と子」を、その周囲に「地域社会や行政の支援システム」をつくることが求められる。これらが機能しはじめるまでには多くの時間が必要であろうが、パートナーシップのもと、じっくりと議論を重ね、事業を継続していくことにより、着実に「ネットワークの構築の創造」を培うことができるだろう。

7. 「子育てネットワーク」の方向性提案

近年「エンゼルプラン」策定により、徐々に福祉面の育て支援が充実してきている。では、「子育てネットワーク」の必要性はなくなるのではないかという声をとときき耳にする。個人的欲求としては満たされることが多くなるであろうが、社会的欲求を見た場合、時代と共に拡大するヒューマンギャップに「学習の場」が消失することは考えられない。構成メンバーや活動内容は変わることがあっても、「生涯学習社会」創造において今後「親の生活体験学習」の場はますます増えるべき活動であるはずだ。

また新たな方向性として、「筑豊子育てネットワーク」は平成11年度子育て支援ボランティア事業を行い、筑豊地区の4大学1専門学校の学生や地域の方々、約90名もの登録を受けることが出来た。それをうけ、平成12年度「子育て支援ボランティアグループ にじ」を発足し、筑豊子育てネットワーク事業を支援してもらっている。子どもたちの保育者として、事業の実行委員として、会の運営のサポートとして、地域子育て情報の収集、そして発足以来の課題であったホームページ立ち上げ並びに管理まで、積極的に活動を展開させている。会の運営についてはボランティアが自主的関わり、「子育て支援」について協議を重ねている。さらに乳幼児期を過ぎた就園児や就学児を持つ親が、今度は支援者として残ってくれるようになってきた。「困ったとき優しくしてもらったからここまで来られた。今度は少し恩返しできれば」と後に続くよい循環も生まれつつある。

親の体験学習を重ね、その認識をもとに行政や地域などサポートを行う。当事者だった親達が次世代では支援者として機能し始めるときこそ、子育てのネットワークが社会システムとして効果を発揮するのではなからうか。今蒔いている種を大事に育てていきたい。

8. おわりに

子どもの育ちには、子ども自身の発達と共に親が成長をしていくことが必要となる。子どもの発達に応じた「子育て」をしていくには、親が多くの生活体験をする事によって、「子どもの育ちに何が必要であるか」を学習し、環境を醸成していくて取り組んでいく力養っていく必要があることがわかった。しかし現実

は、自分を含め親世代の体験の乏しき、親としての未熟さという家庭の教育力の低下を認めざるを得ない。地域はこの現実を真摯に受け止め、子どもと同時に「親の学びの場」を創造していくことが、大切になるだろう。

子どもの育ちには、子ども自身の発達と共に親が成長していくことが必要であることがわかった。親も多くの生活体験をすることによって、「子どもの育ちに何が必要であるか」を学び、環境を醸成していく力を養うのである。

本稿は子育てネットワークの活動をもとに、親たちが生活体験学習をおこなっている事例を紹介した。①子育て問題直面→②集いの場へ参加→③子育て学習体験→④子育てネットワーク活動→⑤地域コミュニティとのつながり→⑥まちおこし、まちづくり。このような進展していく過程に生活体験学習の成果を見いだした。また次なるステップとして、乳幼児時期後に続く就学時の「PTA」や「子ども会」などへのリンク、また社会の一員として「地域コミュニティ形成」を学んでいく展開を期待されているところである。

「子育てネットワーク研究会」は、それぞれの地域で活動している子育てネットワークの有志によりつくられた研究会である。活動の活性化、課題解決に向けて学習を行っている。子育て中の方へ、これから親になる方へ、応援のエールとなれば幸いである。

《注釈》

- (1) 服部祥子 精神科医 朝日新聞掲載論文 1998年1月7日より
- (2) A・ポルトマン 高木正孝訳「人間はどこまで動物か—新しい人間像のために」岩波新書
- (3) 大学公開講座 1997年10月 主催 福岡県立大学、飯塚市、福岡県地域福祉振興基金
- (4) 伊藤雅子 元国立市公民館職員「子どもからの自立」未来社 国立市公民館保育室運営会議編「子どもを育て自分を育てる」未来社など
- (5) 筑豊子育てネットワーク 団体活動状況概要 平成12年1月作成分より
- (6) ちくしの子育てネットワーク 筑紫野市内の育児サークルリストより
- (7) 相戸晴子 乳幼児を抱える母親に対する意識調査

- 2000年1月実施より
- (8) 代表者への聞き取り調査 2000年2月実施 子育てネットワーク研究会メンバーから
- (9) 河野和枝 さっぽろ子育てネットワーク 2000年3月、第1回子育てネットワーク全国交流集会資料より